

意味構造と構文構造の結合

平 澤 洋 一*

Meaning Structure and Syntactic Structure

HIRASAWA Yoichi*

Abstract: It is necessary to have the relation as the meaning structure which some nouns and adverbs to connect with the predicate and for a sentence to be generated. The meaning structure of the verb, the adjective, and the predicate must form a connection which doesn't contradict. Meaningful sentence is generated only at the case which it is possible for the meaning structure and the syntactic structure to combine.

Keywords: semantics, predicate, semantic structure, syntactic structure

* 城西大学教授

1 はじめに

留学生を対象にした日本語の文法では、初級・中級レベルでは単純な文構造の説明とパターン練習に重点の置かれることが多く、上級以上の文法教育でも比較的簡単な構造の文を例文として扱うことが多い。品詞論的には、名詞・助詞から入って動詞、形容詞、副詞、助動詞などへと進んでいくように編纂されたテキストがある。叙述文「AはBだ」のような文から始めて疑問表現・命令表現・依頼表現といった表現類型と構文構造とを結び付けて学習させていくように編んだテキストもある。

単純な文だから構文論の問題がないわけではないし、説明が少なくていいというわけでもない。名詞や助詞を教えるから動詞や形容詞を教えると頭に入りやすいのか、日本語の文型・構文構造を教えるから個別の単語の品詞論的機能や用法、辞書の意味とのかかわり、さらには類義語や語彙体系などに触れていくのが分かりやすいのか、どのような手順で教授するともっとも早く正確に習得してもらえるのか、すっきりした方法論になかなか行きつきにくい。

文のしくみを解明するには、構造と体系の両面からの考察が必要である。構造とは統合関係にあるものをいい、大小の言語単位が同じ種類の単位と連鎖状に並ぶ関係といえる。統合関係にある文は、連鎖性+線条性+階層性をもつ。モーラ構造、音節構造、文法構造、語彙構造などがこれにあたる。これに対し体系は、連合関係にあるものをいい、ある言語単位と形態・機能・意味など何らかの点で類似性と選択性をもつ単位の関係といえる。連合関係にある語句は、類似性+弁別性+選択性を有して、有意味な文の生成に関与する。音韻体系、代名詞の体系、助動詞の体系、敬語体系、語彙体系、意味体系などがこれにあたる。

本稿では、文というものが単純な命題・伝達内容から複雑なそれへと拡大していく中で、どのような格や品詞と関係し、どのような構文構造をとっていく傾向があるのかを考察する。

2 日本語文の基本構造

日本語文法論において、これまであまり論じられてこなかったのは、助詞・助動詞の構文論的機能、活用形と音韻論・意味論との関係、格と構文構造などに関する問題であろう。本稿では、これらの問題について、若干の考察を加えるものである。

(1) 文の基本構造

文は「命題+モダリティ」から成ると設定したうえで、議論を進めることにする。

| | | | | | | |
|--------|-------|-----------|-----|----------|-------|------|
| 弟が父にほめ | られ | てい | た | よう | です | ね。 |
| a | b | c | d | e | f | g |
| (命題) | -seru | -tearu | -ru | -'yooda | -desu | -'jo |
| | -reru | -tesimau | -ta | -mitaida | | -zo |
| | | -hazimeru | | -'wakeda | | -no |
| | | -'owaru | | -rasi'i | | |

上記は「弟が父にほめられていたようですね」を例にして、文の主要な構成要素を配置したものである。aは伝達文の中心部分をなす命題部。bはボイスを担う部分であり、ある動作・変化を表すときに誰・何に焦点を合わせて表現するかというカテゴリーとして「使役」「受身」「尊敬」「自発」を表現する。cはアスペクトを表現する部分、述語の表す動作・変化などが基準の時とどのようにかかわるかを表現するカテゴリーである。アスペクトは二つに分け動態アスペクト、静態アスペクトと呼んでおきたい。動態アスペクトは「かける、かかる」(将現態)、「はじめる、だす」(始動態)、「つづける」(継続態)、「おわる、てしまう」(完了態)、静態アスペクトは「うとしているところだ」(将然態)、「ている、つつある」(進行態)、「ている、てある」(結果、既然)である。dは時制・テンス。これについては次節で触れる。

eは「だろう」「らしい」「ようだ」「そうだ」「かもしれない」「にちがいない」などムード(心的態度)や判断を表す部分、fは丁寧の「です」「ございます」、gは「よ」「ぞ」「ね」などの終助詞である。

(2) 現在形・過去形の意味

日本語教育では過去／現在、過去／非過去とするテキストが多いようだが、完了／未完了も使われる。が、このことがテンスの扱いを拘束することがあってはならない。

動詞ル形けいによる「現在」「未来」の区別

a ル形は一般に「未来」を、テイル形は「現在」を表すという考え方がある。

S1 夕方には雨が降ります。(未来)

S2 いま雨が降っています。(現在、進行)

b 動詞ル形は「現在」も表せる。副詞をつければ、なおはっきりする。

S3 この時計はいまでも動いている。(現在、状態)

S4 この木は毎年花が咲く。(現在までの習性)

c 形容詞文・形容動詞文・名詞述語文は非過去形で「現在」を表す。

S5 私は今日は忙しい。(現在、状態)

S6 今日は富士山がきれいだ。(現在、状態)

S7 私は学生です。(現在、状態)

この a～c の例文の「現在」「未来」という時間的位置を表現していることは理解できるが、だからといって日本語に「過去」「現在」「未来」という時制のカテゴリーが必ず必要であるという拘束をしてはならない。過去・完了を表現する形式には「た」「だ」があるものの、「現在」と「未来」を言い分ける表現形式は存在しないからである。とすれば、ル形は「過去／非過去」「完了／未完了」の区別で済むことになる。今後の議論に委ねたい。

次に、タ形の機能は何か。タ形は「完了」「過去」「その他」を表現する。連体修飾構造文の連体修飾部分内の述語のタ形は完了を、主文述語のタ形は「現在」や「未来」を表すことが多い。が、このケースでも「未来」という設定が必要か否かには慎重な議論を要する。

タ形（過去形）→ a 完了、b 過去、c その他を表す。

a 完了→書きおわった人は帰っていい。〈主文末は未来〉

書きおわった人は帰っていい。〈主文末は現在〉

b 過去→昨日大阪に行った。

c その他→ぞんざいな命令、発見、再認、反実仮想など。→どいた、どいた。

お名前は加藤さんでしたね？ もう少し遅かったら助からなかった。

3 格と基本構文

まず、意味格と叙述形式または後続形式の関係について述べる。本稿では「病気で会社を休む」という「単文」は、語彙の意味と文法の意味を担う語句の意味格⁽¹⁾を [] に、語句を () に入れ、もっぱら文法の意味のみを担う接続詞・助詞・助動詞・補助動詞の類を < > に入れて表示するなら、「病気で会社を休んだ」は、[原因理由格(病気)] + <で> + [目的格(会社)] <を> + 述語(休む) <だ> という構文構造をもち、この構造が許されるのは動詞「休む」に「[原因理由格] + [目的格] + 述語」という連鎖を許容する基底意味レベルでの構造が備えられていると考え、どのような意味格を統御できるかという機能は述語にあると仮定したうえで論考を進め、それを実証する方向へと議論を展開して

いきたい。

構文構造を論じるときに、これまで生成文法などで時格、所格、主体格、出発点格、經由格、到着点格、理由格、共同格、比較格、結果格などがたてられてきた。主格、直接目的格、間接目的格という格もたびたび論じられてきた。これらの格をどう位置づけるべきなのか。格は基底レベルでの意味格と表層レベルの構文格に分けて設定すると、文の構造が説明しやすい。意味格は個別語が構文構造に組み込まれて配列されるときに構文的位置を示すもので、名詞述語構文、ダ型構文、動詞構文、形容詞構文のどれを選択するかによって意味格の配列が違ってくるが、どの構文構造をとるにせよ、意味格の格配列は表層レベルでの語順と強くかかわってくる。

日本語の基底構造レベルでの意味格と例文を以下に示す。A～Rは構文要素の分類記号、その記号の後が意味格、主な品詞名、後続形式（助詞、補助動詞、助動詞、終助詞類）の順とし、文法的意味・意味論的意味を担う意味格には []、もっぱら文法的意味を担う構文要素には 〈 〉 を付した。

- A [文頭詞1] : 感動詞 〈 ϕ 〉 → ああ、春だなあ。
- B 文頭詞2 : 〈接続詞〉 〈 ϕ 〉 → しかし、誰も来なかった。
- C [文副詞] : 副詞1 〈 ϕ 〉 → たぶん明日は行くだろう。たぶん明日は行かない (ϕ)。
- D [提題格] : 名詞1 〈は／も〉 → 大会当日は天気がよかった。
- E a [時格] : 名詞2 〈に／で〉 → 3時に駅で待ち合わせた。集合は3時でいい。集合は3時がいい (時格→主格に変換)。
- E b [場所格] : 名詞3 〈に／で〉 → 机の上に置いた。デパートで買い物をした。買い物はデパートがいい (場所格→主格に変換)。
- E c [主体格] : 名詞4 〈が〉 → 川が流れている。
- E d [起点格] : 名詞5 〈から／より〉 → 東京から大阪まで車を飛ばした。ここより中に入れない。
- E e [相手格] : 名詞6 〈に〉 → 父に褒められた。弟に時計をプレゼントした (相手格→間接目的格に変換)。
- E f [方向格] : 名詞7 〈に／へ〉 → 西に向かう。西へ向かう。
- E g [手段格] : 名詞8 〈で〉 → ここから電車で30分かかる。
- E h [原因理由格] : 名詞9 〈で〉 風邪で学校を休んだ。
- E i [共同格] : 名詞10 〈と〉 → 夏休みに友達と旅行した。
- E j [経路格] : 名詞11 〈を〉 → 東京をとおる。

- E k [時間・期間格]：名詞12〈で／は／も〉→飛行機は2時間で大阪に着いた。雨は2週間も降り続いた。駅で3時間〈 ϕ 〉待った。
- E l [比較格]：名詞13〈より〉→弟は兄より背が高い。この部屋は〔 ϕ 〕〈 ϕ 〉狭いね！
- E m [到着点格]：名詞14〈に／まで〉→飛行機が羽田空港に着いた。海岸まで必死に泳いだ。
- E n [状態格1]：名詞15〈で／に〉→23度で3日間温めた。水がたちまち氷になった。
- E o [自動詞目的格] 自動詞の目的：名詞16〈に〉→母と街に買い物に行く。
- E p [他動詞目的格] 他動詞の目的：名詞17〈を〉→朝はパンを食べた。
- F a [程度格1]：副詞2〈 ϕ 〉→とてもゆっくり走った。
- F b [頻度格]：副詞3〈は／も／ ϕ 〉→車で日に3度は往復した。
- F c [状態格2]：副詞4〈は／ ϕ 〉→車は細い路地をゆっくり走った。
- F d [状態格3]：形容詞／形容動詞〈は／ ϕ 〉→値段は安くはなかった。その部屋はきれいではなかった。
- G a [限定格]：名詞18／形容詞／形容動詞〈だけ〉→私だけ遅れた。部屋は狭くて寒いだけだった。
- G b [程度格2]：名詞19／形容詞〈くらい〉→日曜日くらいは休もうよ。外は痛いくらい寒かった。
- G c [限界格]：→停車するまで待った。
- H a 〈叙述 a〉：動詞1（自動詞）→午前中に荷物が届いた。
- H b 〈叙述 b〉：動詞2（他動詞）→黒板に大きな字を書いた。
- H c 〈叙述 c〉：形容詞／形容動詞→川の流れは速かった。川の水はきれいだった。
- H d 〈叙述 d〉：名詞+だ→彼はまだ学生だ。彼はまだ学生なので。
- I a 〈動態アスペクト1〉：動詞3（始動態）→手紙を書きはじめた。
- I b 〈動態アスペクト2〉：動詞4（継続態）→本を読みつづけた。
- I c 〈動態アスペクト3〉：動詞5（完了態）→手紙を書きおえた。
- J a 〈使役／許容〉：助動詞1→生徒に本を読ませた。子供に試験を受けさせた。
- J b 〈受身〉：助動詞2→父に頭を叩かれた。母に出かけるところを見られた。
- J c 〈可能〉：助動詞3→もう歩かれるようになった。そんなに早く起きられる？
- J d 〈自発〉：助動詞4→昔のことが思い出された。
- K a 〈静態アスペクト1〉：動詞6（将然態）〈ている1〉→船が出ようとしている。

- K b 〈静態アスペクト 2〉：動詞 7（進行態）〈ている 2〉→雨が降っている。
- K c 〈静態アスペクト 3〉：動詞 8（既然態）〈ている 3〉→もう雪が積もっている。
- K d 〈静態アスペクト 4〉：動詞 9（結果態）〈てある〉→黒板に字が書いてある。
- L a 〈願望〉：助動詞 5→水が飲みたい。子供は水を飲みたがった。
- L b 〈様態〉：助動詞 6→雨が降ってきたようだ。雨が降ってきたみたいだ。
- M 〈テンス〉：助動詞 7→私は池袋に行った。その本はもう読んだ。
- N 〈判断〉：助動詞 8→すぐ出かけるらしいよ。
- O 〈聞聞〉：助動詞 9→午後からは雨が降るそうだ。
- P a 〈意志〉：助動詞 10→もう帰ろう。これから行ってみよう。
- P b 〈否定意志〉：助動詞 11→もう 2 度とそこには行くまい。
- Q a 〈文終止 1〉：終助詞 1→とても嬉しいの。それ嘘だったのね。
- Q b 〈文終止 2〉：終助詞 2→とても嬉しいわ。
- Q c 〈文終止 3〉：終助詞 3→早く行ったほうがいいわよ。その話、本当だぜ。
- Q d 〈文終止 4〉：終助詞 4→この部屋狭いわね。それ嘘じゃないわよね。
- R a 〈假定条件〉：動詞 10 など 〈なら／たら〉→走ったら間に合った。本当なら嬉しい。
- R b 〈連体修飾〉：形式名詞 など→彼と話したことがある。大きいのが二つほしい。
- S a 〈文体 1〉（丁寧）：助動詞 12 など→それは私です。はい、さようでございます。
- S b 〈文体 2〉（尊敬）：助動詞 13 など→校長先生が書かれた（本です）。お客さまが来られた。
- S c 〈文体 3〉（謙讓）：動詞 11 など→さっそくうかがいます。

上記の助詞類には「夏休みに友達と旅行した」「夏休みに彼とは旅行しなかった」のように「は」「も」に置換したり付加したりすることがあるので、助詞類は簡略表示とした。

また、例えば「母とデパートで買い物をする」→「母との買い物はデパートがいい」、「私は水を飲みたかった」→「私は水が飲みたかった」のように、述語が変わることによって格が変わることが少なくない。上記の例文では「デパートが」は[場所格]から主格に、「水を」が「水が」に変換されている。「いい」「飲みたい」が形容詞型の活用をするので、「が」の付された主格ないしは対象格の語を要求するからである。

E c の「主体格」は意味論上の格であり、[有意志の人間][無意志の人間][無生物]などを表現するものであり、他の意味格が文法的主体格に選択されない限り、自動的に文法的主体格になる格と認定しておきたい。

E l の「この部屋は [φ] 〈φ〉狭いね」は、3 義にとれる。鈴木孝夫 (1973) の比較

(1) 他動化辞= -os- (nokosu など)、-as- (nagasu など)、-es- (kaesu など)、-us- (ucuru⁽⁴⁾ など)、-φ- (husa φ gu など)、-er- (kakeru など)

(2) 自動化辞= -or- (nokoru など)、-ar- (husagaru など)、-ir- (cukiru など)、-ur- (ucuru など)、-er- (nukeru など)、-φ- (susum φ u など)

となる。そして、この (1) または (2) による形態素の結合ができない動詞は、使役形を用いて「自動詞+使役形→他動詞的表現」を、受身形を用いて「他動詞+受身形→自動詞的表現」を、表現レベル(表層レベル)で実現することになる。

さらには、「増す」「運ぶ」「開く」のごとき自他動詞には、構文論の意味・語彙の意味の扱いの複雑さがある。ここではアク/アケル/ヒラクを例にとる。

自動詞アク=①閉まっていたものが開く。ドアガ アク。←→トジル、②始まる。ミセガ アク。←→シマル/トジル。③閉じていた体の部分が開く。メガ アク。←→フサガル、④何も無い空間ができる、アナガ アク、コップガ アク。⑤欠員ができる。⑥暇がある。カラダガ アク。⑦使わない状態になる。ヘヤガ アク。←→フサガル。

自他動詞アケル= A 他動詞:①閉まっていたものを開く。←→シメル/トジル、②開く。ミセヲ アケル。←→シメル/トジル。③閉じていた体の部分を開く。メヲ アケル。←→フサグ。④何も無い空間をつくる。アナヲ アケル、コップヲ アケル。⑤欠員をつくる。ポストヲ アケル。⑥暇にする。カラダヲ アケル。⑦使わない状態にする。ヘヤヲ アケル。B 自動詞:①朝になる。ヨガ アケル。←→クレル。②年があらたまる。トシガ アケル。←→クレル。③一定の期間が終わる。ツユガ アケル。

自他動詞ヒラク= A 他動詞:①閉まっていたものを開ける。カサヲ ヒラク。←→トジル。②始める。ミセヲ ヒラク。←→シメル/トジル。③未開の土地に手を入れて整える。アタラシイトチヲ ヒラク。④新しい流儀をおこす。イッパヲ ヒラク。⑤切り開く。ミライヲ ヒラク。⑥物事を明らかにする。サトリヲ ヒラク。B 自動詞:①閉まっていたものが開く。←→トジル。②始まる。←→トジル。③閉じていたものが広がる。ツボミガ ヒラク。④好ましい状態になる。ウンガ ヒラク (ウンガ ヒラケル)。⑤隔たりができる。サガ ヒラク。

5 受身・可能・自発・尊敬の構文

(1) 受身

受身表現では中立叙述文(能動文)のときの[主体格]に助詞類「に/によって/から」

が付けられた形で文ができあがる。助詞の選択は動詞によって決まる。2種の言い方のできる動詞もある。

に→叱る、嫌う、奪う、取る、泣く、降る→(例) 弟が父に叱られる。

によって→決める、建てる→(例) 法律が議会によって決められる。

から→贈る、教える→(例) 父から子供に絵が贈られる。

「父から子供に絵が贈られる」を例にとれば、基底レベルの構文構造は [[父] 〈から〉 [子供] 〈に〉 [絵] 〈を〉 贈る] 〈られる〉 となり、「贈る+られる」は他動詞型機能語+自動詞型機能語の結合により全体が自動詞型機能語に変換されるので、[絵] 〈を〉は [絵] 〈が〉に変換される。

(2) 可能文

可能表現形式には4種ある。

a -kotogadekiru → (例) kaku-kotogadekiru ※連体形に接続

b -reru / -rareru → (例) kakareru、'okirareru ※未然形に接続

c -uru → (例) kakiuru、'okiuru ※連用形に接続

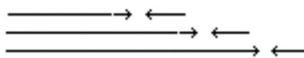
d -eru → (例) kakeru、'oseru ※連用形に接続し I 類動詞 (五段動詞) では i 母音脱落が起きる。

可能表現のできる動詞とできない動詞があり、可能形をつくれるのは意志動詞である。意志動詞は主体格において動作主体をとれる動詞で、副詞「わざと」と共起できる。「話す」「取る」「書く」「買う」「受ける」「来る」「する」などがこれに該当する。

無意志動詞は副詞「うっかり」と共起でき、「落ちる」「転ぶ」「来る」「する」などがこれに当たる。そして、意志・無意志の両方に使える動詞も少なくない。

次の文に見るような助詞の違いは、基底レベルでの構文構造の違いではなく、動詞「教える」が逸早く [英語] 〈を〉と結合して [[[[花子] 〈は〉 [英語] 〈を〉 教える] 〈可能〉 〈られる〉] 〈時制〉 〈る〉] という構文を作り上げる構造と、動詞「教える」が可能の「られる」と結合して [[[[花子] 〈は〉 [英語] 〈を〉 教える] 〈可能〉 〈られる〉] [時制] 〈る〉] → [[[[花子] 〈は〉 [[英語] 〈を→が〉 教える 〈られる〉] 〈時制〉 〈る〉]] に変換される構造になるとすると、構文の違いが説明しやすくなる。

花子は英語を教えられる。

花子は英語を教えられる。

 ※「る」はテンスを表す。

花子は英語が教えられる。

花子は英語が 教 え ら れ る。
→ ←
→ ←

上記の例文のように、-reru / -rareru / -eru などがついて可能表現が形成されるときに、他動詞目的格の格助詞「を」が「が」に変換されるのは、(1) の受身文で指摘したように、述語全体が自動詞型機能語に変わるからである。

(2) 自発表現

自発文は、受身文・可能文とは構文が異なる。基底レベルの [[[[花子] 〈が〉 [昔] 〈を〉 思い出す] 〈自発〉 〈れる〉] 〈時制〉 〈た〉] から、表現レベルでの [[[[花子] 〈が→には〉 [昔] 〈を→が〉] 思い出す 〈自発〉 〈れる〉] 〈時制〉 〈た〉] に変換された構造となる。

花子には昔が思い出された。(「花子には」の部分は、主語ではない)

花子には昔が 思い出さ れ た。
→ ← (補文 = 花子が昔を思い出す)
→ ←
→ ←

(3) 尊敬表現

敬語は文全体にかかる、これが受身・可能・自発の構文と異なるところである。「校長先生が経過を話された」を例にとれば、[[[[校長先生] 〈が〉 [経過] 〈を〉 話す] 〈尊敬〉 〈れる〉] 〈時制〉 〈た〉] という構文である。

校長先生が経過を話された。

校長先生が経過を 話さ れ た。
→ ←
→ ←
→ ←

6 構文構造と語彙

本稿の「1はじめに」で言及した連合・統合関係は、これまで見てきたような使役・許容文、受身文、可能文、自発文、尊敬文はもとより、あらゆる単文や複文・重複文などにおける基底レベルでの意味格の語・語彙との〈叙述 a / 叙述 b / 叙述 c / 叙述 d〉との結合において、きわめて重要な意味をもつ。「桜が咲く」であれば、「桜」は辞書的意味や社会的意味・歴史的意味・地域的意味・文化的意味などのほかに、[街 / 山 / 土手……] 〈で〉 [初春 / 3月末に……] 〈に〉 [7日間 / 1週間……] 〈くらい〉などの意味格に挿入可能な

語と同一構文上で結合しながら「咲く／散る……」などの叙述表現語彙とも選択結合できる構文論的意味を有していなければならない、「咲く」の方も〔時格〕〔場所格〕〔主体格〕〔期間格〕……〔程度格〕〔状態格〕のような構文型をもっていて、意味格群の語彙構造と述語の語彙構造・構文構造が一致した要素・文成分のみが結合して基底レベルの文が生成されるのではなかろうか。

文の生成いくつかの名詞や副詞と叙述表現形式とが結びついて文が生成されるためには、(1) それぞれの名詞や副詞が有する意味構造と (2) 叙述表現形式としての動詞や形容詞のもつ意味構造とが相矛盾しないような連合関係を有していなければならない。と同時に、(1) と (2) の各語が構文上で結合できるような統合関係をもっていなければならない。(1) と (2) の意味構造と構文構造とが結合可能なケースにおいてのみ有意義な文が生成されると考えられる。

注

- (1) 格の名称はFillmore Charles J. (1968) “The Case for Case” in E.Bach & R.T.Harms (eds.) 1-89 (1975)、奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店、平澤洋一 (1979) 「難易文構造と補文構造」(『都大論究』第15号、東京都立大学国語国文学会) を参考にした。単語が互いに概念的な矛盾を起こさないような結合をなして文が生成されるためには、単語の配列を統御しているのは叙述表現形式であり、本稿ではこれを基底レベルの構文構造と規定し、叙述表現形式の統御下に置かれる語句(文法的には名詞や副詞の機能をもつ語句)の構文内位置を「意味格」と呼ぶことにし、基底レベルでは「文=意味格1+意味格2+……意味格n+叙述表現形式」とする。意味格を []、助詞類を < > で表示すると、基底レベルでは「父が弟に時計をプレゼントした」= [主体格(父)] <が> [相手格(弟)] <に> [目的格(時計)] <を> 述語(プレゼントする) <た> となり、文法的機能を備えた表層レベルでは、[主格(父)] <が> [間接目的格(弟)] <に> [直接目的格(時計)] <を> 叙述表現形式(プレゼントする) <た> という構文構造になる。主格・間接目的格・直接目的格は、構文内で文法的配列機能のみを担うにすぎないので、表層レベルの格と考える。
- (2) 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』67-74頁、岩波新書。
- (3) 本節では一つの解釈例を述べたに過ぎず、日本語教育での文法教育において、基底レベルや表層レベルを設定してわざわざ文法を難しく教える必要はない。
- (4) 'ucusuのcは、複合子音 [ts] を表す形態音韻記号。

